

土屋正義編輯

繪本石山軍記

第三編

三

特
遠
2269
23



遠 14
2269
23



鞍馬

貴布祢

上加茂

京都所司代

村井長門守邸

舟岡山

繪本石山軍記第三編卷之三目錄

○鈴木重幸竊小權四郎の家小寓る

並農夫又九郎權四郎を鉤出を

○農夫又九郎仁慈を表小權四郎を欺く

並鈴木重幸不慮に横死を

千束

権四郎宅

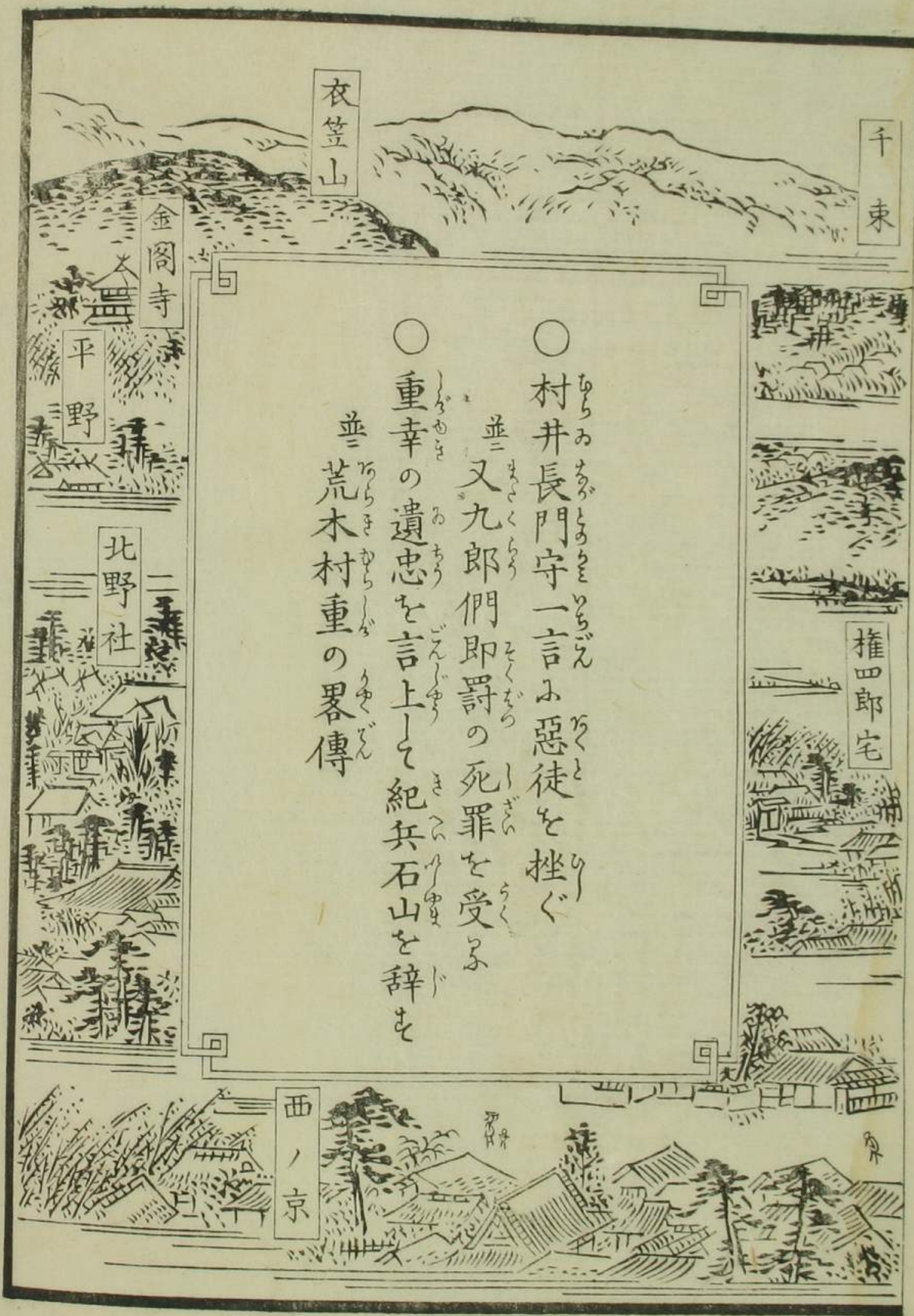
衣笠山

金岡寺

平野

北野社

西ノ京



○村井長門守一言小悪徒を挫ぐ

並 又九郎們即罰の死罪を受ふ

○重幸の遺忠を言上し紀兵石山を辞す

並 荒木村重の畧傳

繪本石山軍記第三編卷之三

土屋正義 編輯



○鈴木重幸暗に権四郎が家に寓る并に農夫又九郎権四郎を釣出さ

茲に其頃京都ハ北野郷中に躬元幽に打過しりし農夫権四郎と云

る者あり近頃此郷中に來住して朝夕の畑さく立ちたれど更小悪臆

たる心もまゝ愚直を以て人小聴さき誰云ともれく介往昔ハ由有者の

果ちん林四隣知己の者語合に生國ハ紀州出の由に就薄々隣家よ

り言立々々ハ石山の軍師鈴木重幸が由縁の者と云囉しける然故小

懇意の者ハ権四郎ハ夫を白状小尋ね問もあり権四郎聴ども唯打笑ひ

諺小穴を穿つて堤を壊すと由なき繚ハ聴ずともあき世小家景の詮鑿

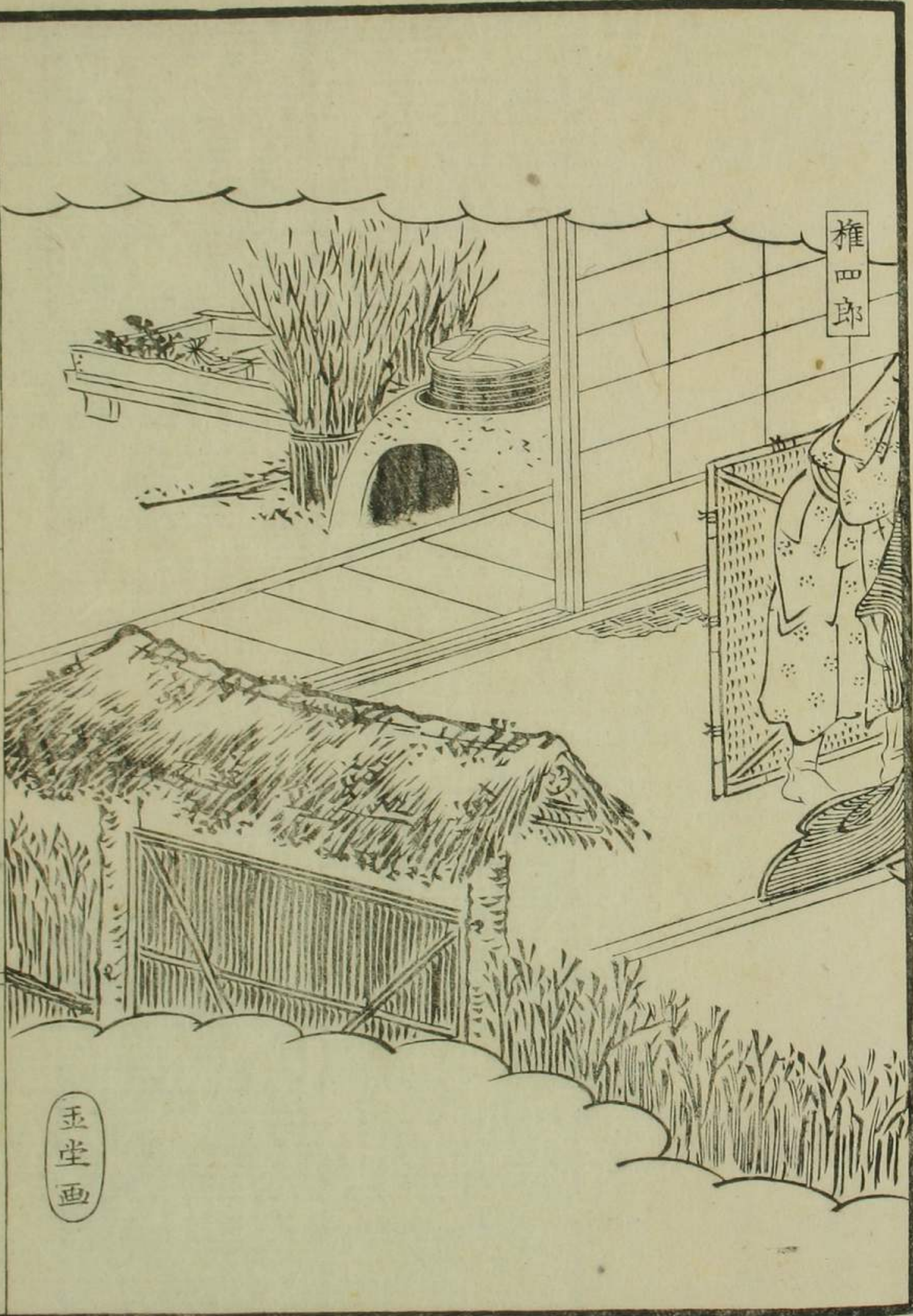
石山軍記第三編卷之三

八富るに如ずく此二も素姓云ざりしは人食鈴木の由縁と看て把鈴
木に因り漢子たればと小鱧之介と異名を号て郷中の男女恐れ合け
る然るに當地の京兆尹村井長門守貞勝より都下一円小鯛を廻し
鈴木源左衛門重幸の澱川入水の轉末を書立生死不定の當敵一將
尚水死と看せし戰場を技竅に潜匿せんも量難く依之を舍藏置
者重幸は使氣小似れども公儀小對してハ不届至極之舍藏罪を悔
て訴へ出れば介功は依り免恕す一又脇より當人を搦め捕ふ手り餘
らば討取とも介者の働きの等々格別の褒美沙汰有ざりしと洛と
勿論方り鄙村陋巷まで嚴重小回違われなき世に武將の嚴命は恐
れ惶と賤しき非人野伏者とも鈴木が故意容を寢て立復ひや為つら

んと眼圓にして打瞻めり何里も往來を寂莫者たり偕此時彼
農夫權四郎方へ由有氣なる武士一個密に權四郎舍藏置深く世を
忍ふ形勢をねを躲るる体ハ子細ぞ有んと近隣の男女ひそめ合
心を止めし窺ひ看るに年齢四十五六歳と思し面白く鼻梁豊満
一眼長く眉毛薄く尻上りて及の如く唇丹花の色を含み四の字形鬚
髪黒き中に翠を兼り體動ずて大山の如く何様天晴將帥の相貌
見ハけき隣家の者看より愈駭き是を紛々方なき御尋の重幸併
名高き武術の達人なり障らぬ神に崇なりと云を空しく口外ハ大患乃
根ぞと面々知ぬ燕して過しけるが實隱すより顯るハかりし誰云と
なく農夫小鱧が家小大鱧をこそ餌喰に寄り網なん下さば大金得

つゞきまど瓢戯交りに打囁き々れバ此郷中に無頼の博奕徒御出の又
 九郎と呼ぶ農夫あり那緯依らず見出し己が金儲の種小く酒
 色の料の當にせん俗謂地所の猿なりけり故小他亦此漢子を嫌が
 りて視目臭鼻とも仇号せり又九郎些く小力量あり固より強氣の
 悪徒たれを疾くも推四郎方の容子を聴出し正く余者重幸に疑い
 なし俺如何もして其奴を引捕へ京兆尹殿へ差出す則ハ些く共千兩乃
 褒美を得つづ然も孔明正成も劣ぬと云世に比類なき謀
 士の獨歩悪く手出しせば掴み挫ぐま人身御供小せくるは必定甘
 味欺つゝ寢込を仕懸寝首を搔べき美段するが危篤氣なりと心
 に點頭先荷膳徒を談合ぶ一己の腕先は木挺小合ぞ悪徒夥

計の壯者們を拾們許りに密談して諸事ハ此方一個計之し須
 乎今宵と究る則を仕損せぬ様加勢を憑むと云悪徒の夥計愈
 心得りりと又九郎の憑に應トける却説鈴木源左衛門尉重幸ハ
 一旦澁川小入く死を示すれ今世に存命べき心を有ぬ既小九郎
 年の間信長の為本願寺の宗法退轉させんと辛苦盡せし緯を
 願へ石山御門主の御怒り抱くは俺躬も口惜き遺恨あり素
 より信長命の有ん限本願寺を攻潰さんとの悪念止まざる緯見放
 けり故免しも角にも死る一命俺躬小俺命を預りて今一度信長の傍
 小規の寄躬を棄てては協いぬまがも得るを討ねと云緯無らんやえ
 俺澁川に没すも看せども尚も存生の虚實を穿とんと諸方詮鑿せ



玉堂画

重幸死を詐
 京師に來
 り旧僕権四
 郎が家へ潜
 伏す不圖



人^{ひと} 緯^{いと} 必^{かならず} 定^ま 方^{かた} 故^{ゆゑ} 小^こ 今^{いま} 遠^{とほ} く 奔^{はし} らん と せ 代^{かた} 嚴^{げん} 密^{みつ} 查^{しや} 警^{けい} の 探^{たん} 索^{さく} に 罹^{おそ} り 者^{もの} 咎^{とが} ら ね ね 把^と 圍^に ま れ 却^{かえ} 死^し 小^こ 增^ま 耻^ぢ や 受^う ぬ 人^{ひと} 幸^{さい} 昔^{むかし} 俺^{おれ} 召^{めい} 使^し ひ けり し 奴^{やつ} 僕^べ 権^{けん} 四^し 郎^{らう} 故^{ゆゑ} 郷^{きやう} を 去^さ 京^{きやう} 師^し 北^{きた} 野^の 郷^{きやう} へ 住^{すま} 居^ま ます 由^{よし} 去^さ 年^{ねん} 石^{いし} 山^{さん} 中^{ちゆう} へ 信^{しん} 耗^{かう} 聞^き せり 渠^{その} 原^{はら} 来^{きた} 扑^つ 訥^{とつ} 愚^ぐ 直^{ちゆう} の 漢^{かん} 子^し ま ね 話^わ を 話^わ せ 快^{かい} と 舍^{しや} 藏^{ざう} 兵^{へい} 人^{にん} と 鎧^{よろい} 冑^{けう} を 水^{みづ} 底^ぞ に 投^な 棄^す 介^け 夜^よ 小^こ 京^{きやう} 都^と へ 逃^{にが} 上^り つ 北^{きた} 野^の の 権^{けん} 四^し 郎^{らう} 許^{もと} へ 尋^{たづ} ね 當^{あた} り 対^{たい} 面^{めん} 小^こ 速^す ぶ 権^{けん} 四^し 郎^{らう} へ 驚^{おど} き ま せ り 後^{のち} 来^{きた} 使^し ひ けり 主^{しゆ} 人^{にん} 方^{かた} ぬ 九^く 年^{ねん} 疎^そ 遠^{えん} の 面^{めん} 會^{かい} と 云^い 悦^{えつ} び 憧^{ちゆう} む 緯^{いと} 大^{だい} 方^{かた} 方^{かた} 々^々 殊^{こと} 肌^{はだ} 寒^{さむ} 氣^き なる 薄^{うす} 衣^{ぎぬ} と 着^き 無^な 礼^{れい} かん 是^{こゝ} 召^{めい} 給^{たま} つ 己^{おのれ} が 襪^わ 褌^{ふんどし} の 古^{ふる} 布^{ぬい} 子^こ を 出^だ し 酒^{さけ} を 整^{ととの} へ 飯^{いひ} を 焚^{たき} へ 餐^{あは} 應^へ 赤^{あか} 心^{こゝろ} 竭^{つき} けり 勤^{こゝろ} けり し ね 重^{おも} 幸^{さい} 大^{だい} 小^{せう} 心^{こゝろ} 安^{やす} 堵^と つ 竊^{ひそ} 小^{せう} 野^の 原^{はら} 出^い 張^は の 軍^{いん} を 譚^わ り 故^{ゆゑ} 意^い 望^{ぼう} を 包^か みて 云^い 々^々 様^{さま} を

俺^{おれ} 石^{いし} 山^{さん} へ 歸^{かへ} る 躬^{こゝろ} の 上^{うへ} 方^{かた} 々^々 も 數^す 年^{ねん} の 戰^{せん} 争^{しゆう} に 倦^う 果^は 今^{いま} 般^{ぱん} 御^ご 門^{もん} 主^{しゆ} の 御^ご 暇^{げま} を 願^{ねが} ひ 戦^{せん} 場^{ばう} 陣^{じん} 没^{ぼつ} を 表^{あらわ} して 斯^{こゝろ} 修^{しゆ} 羅^ら の 巷^{ちやう} を 遁^{にん} れ 出^い 後^{のち} 生^{せい} の 勸^{すす} め に入^い 後^{のち} 生^{せい} 知^し ず 敵^{てき} 味^み 方^{かた} の 生^{せい} 命^{めい} を 屠^あ ず 緯^{いと} 造^{ぞう} 惡^{あく} 皆^{みな} 重^{おも} 幸^{さい} が 躬^{こゝろ} 小^{せう} 被^ひ き 宗^{そう} 旨^し 歸^{かへ} 信^{しん} の 本^{ほん} 意^い を 失^う 依^よ り 武^ぶ 士^し 道^{だう} を 止^と 止^と 遁^{にん} 世^{せい} 者^{しや} と なり 祖^そ 師^し 私^し 法^{ぽう} 在^あ り 靈^{れい} 場^{ばう} 廿^に 四^じ 拜^{はい} 遍^{へん} 參^{さん} 思^{おも} ひ 立^た ども 敵^{てき} 織^む 田^{でん} 方^{かた} の 詮^{せん} 議^ぎ を 憚^{おそ} り 道^{みち} 中^{ちゆう} の 程^{ほど} も 最^{さい} 心^{しん} 元^{げん} なく 暫^{しば} く 汝^{なんぢ} が 許^{もと} 小^こ 舍^{しゃ} 藏^{ざう} 受^う け 世^よ の 風^{かぜ} 説^{せつ} の 静^{しず} る 時^{とき} を 着^き 敬^{けい} 行^{ぎやう} する 思^{おも} へ 口^{くち} 品^{ひん} 言^{げん} を 説^{せつ} け 聞^き へ 正^{せい} 直^{ちゆう} 一^{いつ} 図^ず の 権^{けん} 四^し 郎^{らう} ゆ 小^こ 重^{おも} 幸^{さい} が 憑^よ り 輒^{すなは} ち 諾^{だく} ひ 貧^{ひん} 者^{しや} の 芭^ば 屋^い 御^ご 厭^{えん} ひ 無^な ん ぞ 幾^{いく} 日^{にち} 力^{りき} かり 逗^と 留^{りゆう} 在^あ り 京^{きやう} 田^{でん} 舍^{しゃ} の 端^は 々^々 郷^{きやう} 者^{しや} と 粟^{あは} せ 若^{わか} 狭^さ 鱒^{ます} 丹^に 後^{のち} 鱒^{ます} の 塩^{しほ} 辛^か 物^{ぶつ} 土^ち 地^ぢ 自^{みづか} 慢^{まん} の 名^な 物^{ぶつ} 野^の 菜^{さい} 八^{はち} 泥^{でい} 土^ち 辛^か 壬^{にん} 生^{せい} 菜^{さい} 松^{しょう} 草^{そう}

葱夫ハ御寺箆に喰飽給もん此外献進の佳品何れもなし不自由ガ
地所の名代かりと云並べるも實正直ニテ重幸打笑ひつゝ稟しつゝ
ハ戦國の代に生るゝ武士は腰兵糧を焼飯煎米茶湯得ぬ時と流氷
の泥水溪水嗽りて渴を潤支畢竟佳味を好む美食を望む遊民
徒食する榮耀の沙汰ナリ生死の境を戦に決するに香味の食を貪
るべまやハ鹿菜麻食ハ健剛の根と古人も深く諭し置り況も順
拜長旅を思ひ立に高祖の御响勞に效ハズば靈地靈刹巡りて詮
一介段心遣無用と云一唯他の視聽を塞ぎ呉よと云む推四郎畏
りて要慎し重幸を契の一室小閉蟄らむ手水食事も持運びて
心を配りて舍藏居々ふに自夫二日許り鳥の過る項京兆尹村井長

門守より洛中洛外鄙まづも觸達し重幸の詮鑿嚴しくれば推
四郎恐りて密に私言主人當所小隠れ御座を僕ハ苦く存せざれども
平日俺躬の生國出所を紀州鈴木家由縁の者と誰稟せや人能
知く俺小尋ね問緯度々かり僕曾く應答もたゞ長光陰暮
まゝいれども村井の穿鑿密なる則ハ是亦の衆評を聽出して不意
の捕方向ふも知安主人武勇の御手練も太刀鎗火筒の武器も有
れど捕方を防ぐる便ハあく忌々敷御躬の大事に違わん然らば茲小
匿れ御座すハ僕最々氣濟仕と僕御供稟すれど片時も早く
北國路へ立退せ給つゝ勸めよりの重幸打點頭了云々様ハ當家立
去に汝を俱してハ愈重幸と氣把もて四方に追人を懸るは必定

汝小响勞きせん心々ぬ一翌かん速に啟行すし今甲夜一夜尼介
 受人辛抱憑むし聞へくも權四郎落涙して疊小伏し是ハ勿体なき
 仰せ小候らく追立稟すやう苛奉りも主人の厄難を危踏ゆへ年来
 御恩を報ト進せんと時節を向へド斯る仕義小て出せ参す躬の不
 甲斐なき僕が心の悲しき面なき匹夫下賤に生れ出たる不徳を悔
 む外候はず恕なき給へと泣詫く小を重幸も亦愚直を恤む感涙催
 ふし袖濡しける折しも地所の歩行が声として權四郎ぬ宿小居
 るや小作豊凶の緯し就く村長より下農夫へ立年貢の話が有る村
 長許へ召集ふるか心を早々なれとちよ声に門口より言捨立帰
 りける權四郎八時かぬ年貢の一條小作へ觸るは心得難しと不審

かからし村長の招き遅多りてを悪かんとして卒と重幸へ譯を
 話して裡より門の戸鎖堅めさせ心残して趨出小たり是彼悪棍農
 夫又九郎地所の村長某に密談し偽つて先權四郎を釣出し泊人の
 實否を問詰めて謀つて一己の手柄をなし大金の褒美をせしめんと
 思ふ伎倆の級方なり

農夫又九郎仁慈を表に權四郎を欺き 鈴木重幸不慮に横死す

斯く農夫權四郎ハ招きに應じ村長が許し到り見るに諸の農夫
 打寄もせず上座を村長座席に着せし下て又九郎端座を其
 餘に人々着へりしを權四郎村長へ招請の旨趣を問村長某答へて
 云様當地御京兆平村并戻より猛可疇昔御觸達しあり石山の軍師

鈴木源左衛門尉重幸去月二十九日揚州小野原下居の戦ひに己小
 官兵の為敗走に逃び同國西村堤小来り入水す依之亦死散と搜し
 求むれど更に下流小押流る共者不最智謀利を癖者なりは耳目
 を暗き竊小生延何里に潜し躲きんも知す武将小敵對逆徒ゆ小
 草を分つと穿鑿すべし尙舎藏置る方人上を凌ぐの罪科怒し
 難く併過失を悔訴へ出なば却上への忠義をわを思免の沙汰小
 速ぶづき此旨郷中一統觸知すべしと太も嚴重なる稟し度し
 小作年貢の絆入有て災ひ必至の言渡しに愚直の権四郎胸打噪ぎ
 原来早氣把れりくと面色変り許りに驚け傍より又九郎聲伐
 顛め今且那村長を敬の仰せらる所ハ則御觸表の言度なり然も世間

の里諺にも云り兎死すれば狐哭しむと誰れ他の窮苦を悦ぶべき
 や殊に鈴木重幸殿ハ石山とハ無く協しぬ随一の軍師宗旨門下
 の者們小於ても此人を御堂守護神と尊まり別く此邊ハ門徒多
 きゆへ你が許の泊人と謂ハ鈴木氏と大概察れども弓も引方宗旨
 の輩僉勦り助る心と起して看ても者ぬかり知ても云ず災迫端り
 逃バぬうちに疾々退き給へと思ふ而已舎藏者も嚴科と有且那
 村長を敬と吾儕密談の上故意年貢用に言計較く御宅へ呼出
 告知せん為萬一脇外より訴人かごせは當人ハ素より你も累繼臍を
 啗とも詮からる一你的實意も画餅縹とちらん何分京地放れぬ
 北野郷中潛居在る土地思はん何國へちり共土地替らるが始終

の恭安なるべしとて且那を始り此又九郎まで宗門具員の老婆心なり
別々且那ハ一郷の束をまき表向の穿鑿とかなバ私議の取計ひる
どかれば是ハ你の孤忠と愍まり此年来の馴染甲斐とて則ち
郷中に住門徒中より聊かぬも首途の賤別と一包の黄金呈進
かぬ明早朝小退身ある門徒們一同安心とんと村長殿への内託
なり余志も棄難とんは是鈴木氏の徳好する所收め明朝啓行
あはと諾誠實らしく辨舌と振ひ胸の毒計張罨とも知ぬ愚直の権
四郎ハ慈情の詞と説示せし門徒中より賤別と号け一包の黄金
適与ののり誰ハ是と奸計と知ん況る愚訥の生質ゆへ竟り又
九郎の謀小乗らまき声頻單やりに語りたる様々今ハ何を秘候ふ

べき鈴木源左衛門ハ僕ダ古主に候ふ今般提州小野原の合戦
時運拙く大敗と成虚謀と構へて戰場を脱走し竊く僕ダ許へ
参られ候ふ凡九箇年不通の主従も恩義小親疎の差別無ね貧
家に暮せど舎藏候ふ主人最早發心菩提の道小傾き廿四拜順
拜の志願あり故小明日啟行せらる心組郷中門徒衆の賤別渡さバ
嗚々欣悦致さるべく存るとて竟小一大事を口灣しなれど村長ハ勿
論悪棍又九郎ハ甘味問威しに陥入り實正重幸と知る上ハ今
甲夜の中を過すべくとて愈悪計の所存を固め又九郎別小一貫
文孔方を出し是ハ些少の志しもまきども古主と勒る你を感して
俺們も余貞操に似る様と祝ぎ酒を進ぜん為し略義かぐらも青

銅で呈に能く酒肴を買調りて主従一盞傾け給ひて聊俺寸
志も届く心なり是も所謂平等施一切同發菩提心俱に廿四拜り
詣る意表失敬の段ハ恕一給へて黄金諸俱に孔方を遮りて推
四郎ハ倍々歡びつ思ひも寄らぬ郷中宗門の深志和君様まで
厚意の賜物辞するは却て無禮に候へば仰せに随ひ拜納仕り主
人へ此緯具稟して歡ませ出立かきしむべ一同恩禮宜く
希入村長も厚く禮を伸て包と孔方を頂戴まつ諾嬉一氣
に走歸り一ッバ又九郎ハ村長と顔着合へ又九郎舌を吐つ稟し
たるは十分歡ませが奇密の仕事今夜の手段が一大事に候ふ且
那殿ハ村の者を集め村中四方の出入口へ張番属く堅め給へ

又九郎精々仕課せんと思つても相敵が勝れ強者なきは一ッ罰
かえ俺も決し難し倘飛出さば刈竿打ひ擲き又倒し置せ造
作なり唯把逃さぬの肝要と云ふ村長も打點頭く尚も又九郎の
耳下に唇差寄密事に時ぞぞ迂りける儲も農夫推四郎ハ村
長が許より立歸る途中何となく胸騒ぎして快くも不圖心裏に
考へ顧み主人ハ人も恐ろ智謀の名将なり村長始め又九郎が贈
物實を明して告る時ハ世と忍ぶ人の意を以て推四郎が躬の負
苦に忍義大事を告て褒美を乞受恩義と着せ懸累繼を恐れ二
夜止めぬ追立出さん推四郎が工夫と思われ此疑ひの無りも
非ず俺今頻小胸騒ぎの何となく心地悪く思ふハ是ホの知せ



権四郎

悪漢又九郎
謀と重幸
成害とる

又九郎



重幸

石山軍記三編卷之三
や有んむらん翌我途中まぐ着送り出途中に於く委細語り賤
別の色邊與時ハ實義の程も見れぬ一家出まふ迄に遊す時を
衆人の志も無足と成俺をも却く疑ひ受まんとも種々おのひ續々
て立歸る重幸待倦て門戸明まら推四郎ハ然氣なき体に年貢の
談合して候ふかり明朝己小御啟行し首途を祝ぐ酒肴の手當僕
一走り調ひ参りかん徳利皿鉢風呂敷も包く再び戸を拙寄て蒐
出たり誠や夫人間の盛衰禍福ハ開る槿花の凋むより速くさしも
石山城の軍兵を預る鈴木源左衛門と云れし名士も一孤の落人と
成る世に吟へば薄尾花の動くも怖畏く僅に僕推四郎がト居
を憑くに鶴の目鷹の目詮議の巷凌ぎ潜らんとする介躬の艱苦

哀れと云も愚かりけり恁く推四郎ハ酒肴索り歸り右左かな
裡介烏も暮つ酒を温め肴を煮附し夕飯の膳の上に酒を出し推四
郎主人小稟しけるハ僕御着受の如く貧人ゆへ餐應仕る筈も無り
一に早明朝御出立と成バ迫る九牛が一毛の祝ぎ酒快く一献召さ
まづ有難しと玉盞を出して勧めりき重幸介節義を謝して曰
く寔に縁無所ハ立寄難く頃日の氣扱ひ黍を折角の餐應喫
盞せんとも推四郎を相手に數献を傾け夕飯も程能食しけり主
後深く酔を催ふ一互小向後離散の話し小春の夜も更るに間なく
神かなぬ躬の主従共し遁れぬ大難迫ると知て翌を約する夢路の
余波途中まで御着立稟すべしと臥室を設けし主人を寝らせ推

四郎も次の室に打卧し、双方酒氣に睡眠も速く前後も知ず寝入
たりけり。嗚呼重幸の運命の數も今甲夜一夜小縮るゆけり。又九郎
が企つ罌に羅り匹夫の毒手に命害ふ。緯宿業の因果にも有べなれど
余遺憾の程云様もあらず。天かり命方を嘆く。余り有此時農夫
又九郎も博徒十個の友を談合権四郎が家の前後小忍ませ己を懐
中に短刀隠し持甲夜より外面に窺ひ居るが亥の刻頃漸物音
静り主従能寝入る。揺動かぬ時分ハトトと脊戸口へ廻り博徒
の者に八楯木鋤鎌面々得物を携へ拿せ。俺声懸次第込入る。念
かふ當人を討課せたる。後日の證人憑むるりと内外の手番ひ。謀じ
合せ脊戸口の扉卒と打外し難く裡へと竊ひ入行燈の火を吹

消しつ。拔足指足し。現ひ寄に亭主権四郎も高鼻きして枕外
してたふもく幸渠が軒小乗と奥の室へと窺ひ入る。重幸が
運命盡めし時や此悪漢の忍び込を知らず。又九郎心に仕濟し。りと
て短刀引拔脊に隠し。徐々と立寄看るに名小負三徳兼備の重
幸が小バ倘や刎起る。緯も有んく。兇惡ながらも底氣味悪く片足
踏込でハ引込つ。兩三度許り跋巡りけるが是ハ臆し。とりと心把直し
鬼神共寝首を搔ん。豈仕課せざ。云緯無らんと欲の及を逆手に
握堅の卒と横の上。足踏踏げ。又先重幸が咽元に差當力を極めく
ぐり。刺急所を刺わく。きりの重幸苦と叫んで眼を開き。賊奴慮
外なりと唯一声罵る。の。苦痛小得忍ず。又九郎ハ尚刎轉させ。と

股乗に去りつと押伏動せど又先薦席まで刺貫きつれ何ハハ
惚るべきやえ四肢も横の中に押付らるる身を悶く緯も自由任せず又九
郎が非道の刃に羅り脆くも茲に横死なせハ哀れ本意なき最期
々り又九郎ハ息の根止るまで突立刃を利抜ずして漸死断りつと省止
けま一息ほりつと呼吸吐く所へ次の室に臥する推四郎ハ主人の一声寝
耳に貫き惱り起上れども真暗手早く埋火發燃木に傳して行燈小
照して奥へ入バ手拭ひの頬包こする一個の漢子刀の血汐を横以て拭ひ
今や起上んとする所なり推四郎意やと仰天し矢庭に又九郎へ組着
懸る又九郎又を揮つて寄着ぶやをまき推四郎靜つて聞斯忍入者ハ
又九郎なり汝重幸を舍藏上らハ公儀に敵對同罪なれども素主後

と謂間を憐れ故意慈情を加へ置一ハ今甲夜忍び入る障りなく
重幸の寢込を討ん俺計畧難なく當人仕留一上ハ俺小屬て自非を
悔語一汝が咎めを宥免憑まぶ又九郎より御京兆尹へ願ひ宜しく
執成なり得さすべし忠義立して敵對するバ重幸同様刺殺すべし
心決めて返答せよと弱身に附込迫端すれば主人を討る怒氣燥る
まバ推四郎物入より刀把出し拔より早く又九郎へ主人の怨敵覚悟せよ
と躍り懸つて斬着ぬ又九郎も大き小怒りて説得加へバ尚附上りて
怨敵ちどくハ太まやらとまきし手料理はせんらだるべしと云も敢て討入
刀を拂ひ除け振込又九郎心得りつと推四郎も破まぶれの死働き小
強氣の又九郎も應ひりつと合殿の者加勢々々と呼立る家の前後り伏

躲れり博徒の夥計十個の者面々得物を奪て込入也又九郎切合ま
から声振立て小鱧奴が入る腕立ひる重幸ハ俺逸討課せり此奴
も共に怙んぐ仕舞と云バ博徒們心得りて手に得物を打振々々
血氣を任す懶墮かれ各別思念も有者なく権四郎を中に追把圍
て用捨なく打込るにぞ権四郎も數人の相敵小防ぎ兼つ打擲の
れく身体弱ま無念に思へど眼曇く撞地後居小伏無慙や主後
一ツ家居にして又九郎們が奸謀の為に敢なく命を隕けりそ又
是非なき躬の果かり聴者長歎せざるハ無りけり

村井長門守一言に悪徒を挫ぐ其の又九郎們即罰の死罪を受る
非義非道を以て榮利を計る者往昔より介類故擧するに違あ

ず天能介非を悪給ふ故小全く安きを得る者更に在り然バ往々
介例有と雖も人欲本心の善性を暗す時小たる人々を苦め人を
虐ぐ大なる人々を殺し家國を奪へ皆一念の欲より發する所實
に慎むべき世小貪欲かり去程小農夫又九郎ハ思ふ儘鈴木主後
を殺害し莫太の褒美せしめんと思へバ先重幸の首級を斬落し
村長へ知せて呼寄つ権四郎の死骸諸共小村の下役人を番に附
夜の明るを待兼て村長を先に立く京兆尹なる村井長門守の役郎
に趣き有司に就く輝の次第を村長を以て訴へ上鈴木が首級を有司へ
手渡り又九郎一己の働きせりて鈴木を討権四郎ハ又向の候ふり
加勢を以て討把とを詳に申し出小々色バ長門守貞勝席に出られ

村長又九郎へ稟さる様訴への赴き健氣の働き介段ハ格別褒取す
かり併重幸ハ公儀の御手當者此方の組子に指令し介方門へ稟
し付る上に手を下すべき是法則かり誰小訴詰して討扱しや自儘
の計ひ心得難しと問わく兩個言句に行詰り村長頭を抱へく蹲
踞ハ又九郎臆せむ答へく曰く重幸火急の出立と承り躊躇
難く存ざり物くら別御届け稟し上ばとも當人討課せざる仕
御奉公し思ひ候ふ唯御觸表の外別儀多く心得急ぐ討取候
ふかりとて諾出り顔小稟し出らむを貞勝又九郎ハ八打、恥付
公廳御觸達一の罪人ハ假令女子小兒の者とりとも下民私の計ひ
ハ成をかくん況や石山方随一とて敵將方り在居音止の届けもく

刺此方の指揮も受ず私に黨を企夜盗同様及物持扱ハ斬害の行
状汝們が手柄を頭さんとして公儀表を輕蔑の致方甚と以く不屈至
極と謂べ此首安土へ言上なり御沙汰を受く裁判看ん先夫迄ハ
公法に任し人をあやめ罪を以く一統獄舎に繋ぎ置べ誰有此
徒列立いと最も烈く指揮有るを村長始め又九郎以下胸の計較
皆齟齬く獵男の猪突へ陥る心地し徒骨折る褒美ハ愚獄舎に入
らる眞罰顛面美天棠之を許さらんや忽躬の非を説破せしめく
獄舎に曳水繋めらる小氣味より一縲どもなり憐れ村井長門
守貞勝ハ一言の下に村長又九郎の心惡の臍を挫拉し即時に入牢
稟し付置猛可に早騎の使節を仕立鈴木重幸が首級を齎し並び

に北野郷村長の某小農夫又九郎不法の處行を具に書札小書認め
 て江島安土本城へ送り奉り主君の御意を伺ひたり内府信長公殊
 小歡び給ひ多年敗軍も此者の所為なり最も石山を退城し小野原
 に出再び本願寺へ歸らざれば心底彼楠延尉櫻井谷へ向ふ等しく
 流石ハ石山の軍師真の武士なり哀れむべき匹夫の手に早る緋死期
 の無念想像るべし宜く葬り得させ遣らざればして夫野善七郎へ仰せ
 度さき安土城下の片邊なる遍照寺と呼真言宗寺中へ首級を葬り
 吊ハせ給ふ剛氣勇烈の御大将も重幸の終焉を憐まれし怨を
 轉じて仁情ありし名君の徳をど願てし給ふ偕又九郎門の所為小
 於るも信長殊々憎し思し召欲心を遂んと公儀を憚む匹夫の自尽

に名士を討緋屹と懲さぐんバ有べかきども又九郎始り余懸の者殘
 らば打首のすべき首を村井長門守へ指揮有し貞勝畏つ又九
 郎門を牢より召出し一同小稟し聽す様を余方門の處行上を恐伏
 せず専ら自儘の暴激を肆し私欲を旨し人を殺害し穿議有者
 亡し心條重々上へ對し不届小就下民心得違これ無様し一同死罪稟
 し附る者あり余首心得ざり言度さき又九郎村長始り十個の者入
 牢の緯さ人思ひ寄ぬ小猶ま死罪の科を言度さき打驚く緯大方
 かりず中も又九郎負人氣者ゆ採側近躍り出く恐まぬがら前
 日御觸達一の御文面を拜閱仕り候ふ小脇より當人を搦め捕ふ手に
 餘ら討取し余者の働きの等より格別の褒美沙汰有るに

候ふ右様御觸面の候ふより俺們只顧上の御奉公と存じ此も速
 く討課せむんと御咎め蒙るべく一切氣着ず失束釀して候へども唯々
 御憐愍を願ひたまはば貞勝聽く苦笑ひつて曰く汝們人を殺す程
 の大事あふ届く上りも念を以て厥ち指令を受て為すべき辭を是
 を則ち働きの等と云自暴自棄に殺伐を行ひ御觸文を右や左論ずん
 却る余非を上り附んとすや君子二言かり公儀の錠命項日尔方們を
 聽合し省るに農業家職と皆名許りて晝夜博奕勝負を締とし
 押借難題を以て人を苦しめ放蕩無頼の悪根のよ博奕諸勝負へ天
 下の制禁此犯科而已も罪輕くす畢竟御觸面の褒美を頼に上の
 御奉公と稟し飾る金銀貪るべきの内心とて此方始り推察し

罷り有誠上の褒賞に領らんとは密誅して上の御沙汰を待
 猥小殺伐すむ所非ざり己が躬の令限も辨へて人を懃害すは是
 奸賊なり如何ぞ助命の勸辨あんや罪を宥免有し命令なれば覺
 悟致すべし稟さきりぬと又九郎の輩返す詞もなく頭を低垂し
 打凋れし八欲が思念の先立必死に逃んぐ初めて覺る皆是小愚
 の平常も有る終に介翌日刑場に引出さる總に介係りの輩十
 二個残り打首とぞ成りけり非道非義の報速くしこれと鈴木の
 怨念も暗めぐ併せ小本意なき話を傳へり
 重幸の遺志を言上りて紀兵石山を辞す并び荒木村重の畧傳
 借も摂州石山本願寺に去る二月廿九日に當り軍師鈴木源左衛

門尉重幸小野原の合戦不入水一加之羽翼と憑き一勇僧根来の
 小密茶を始めとして八百餘人の兵卒を失ひ英氣を損ずる而己た
 らむ向後信長大軍以て攻来らば果敢しき防戦も覚束なく今も當
 山浮沈の期際宗門退轉の時向ひし上人を始め一城の將卒們
 門徒の男女に到るまじく歎き怖畏ざる者無りけり時小谷木孫市
 志摩與四郎の兩個上人の御前小罷り出く泪ながらに言上しけ
 様ハ今般重幸小野原の合戦小陣没を究く出張仕り候ふと深き
 忠節を心に懐き候ふて當宗永父の計畧を存し御法繁昌の基を
 堅るに候ふ更々御愁傷の儀有間敷候へ先日重幸出陣の宵日
 臣們兩個に遺言の密書を遞與宗門不退轉の遠計を成り余遺書

の趣き如何とかわねども重幸當城に在り寸謀を行ひ屢信長の
 軍を折破り味方利軍を得るに似されども信長ハ天下の武將
 して上ハ天子禁闕を補佐し下ハ萬民小政事を布行ひ智勇の
 臣下數百員を抱へ調練の兵士百萬を蓄ふ然る重幸們御方に
 待りて小迫合の勝利を得る緯を全く御為を存して御為まじ
 弥信長の憤りを増長せしめ遂に當山滅亡招らん信長憎める所ハ
 此重幸かり重幸敗して陣没と聞かば渠が怒りの半を解んり且孫市
 與四郎們を先き紀劬の兵士悉く城を出信長の方へ降参すべ
 是亦信長の怒り三分を和し信長の怒りを増ハ危く怒りを解を味
 方安かん是併ながら臣重幸が愚見は非ず辱くも宗祖親鸞聖

人の兩度まで靈夢を蒙り候ふより儲こそ陣没の所存究候ふより
 細々書遺し候ひ畢ぬ猶向後信長當城小攻来る際有ハ防禦
 すべき計畧數條俺們小遺し傳へて候へば重幸存命の時と同ト
 く心強く此俟籠城あせらざる時^の到るを待せ給ふべし臣們兩個
 を始め紀筋の兵卒最大御余波惜くハ候へども重幸遺言に任せ
 退城し信長に故意降参仕り敵に屬く味方の狗となり御安寧
 の手術廻らまじし唯々御余波こそ盡ず候ふこそ鎧の袖を顔又押
 當つ潜然と歎き哭し々々を上人ハ右左の御應答もなき御
 褥の上に伏轉び泪小咽び給ふぞ痛まらざる原來上人は敵味方
 の死凶年来深く悲し給ふぞ奈何も信長の心を和げ假令

石山を退き他邦に於て本山を新建なすともなき宗門の衰
 微に到らんや常に闘戦を厭ひ給ひしり重幸が遺言の趣意
 一々御心裡に協ひ思し召ばや是非なく亦退城承引まじし御暇
 の盃を下し賜をり亦鳥ハ終日御前に在り竭ぬ余波を惜まらざる
 ける徳々翌朝孫市與四郎ハ紀伊國の兵士三千餘人を引卒し
 石山城を去り雜賀に歸郷し頃々使者を立し信長公へ降参
 乃音を歎願せしかば信長原來此程の合戦に石山勢敗軍而已
 かたじけなく重幸入水かきける轉末今ハ協しまじし降参すの但
 しハ是も重幸の遺謀かる乎何れもせよ尾を伏憑む所心得し
 し先渠們が乞に任すも亦動搖も試みなんこそ以後敵對すぬ



鈴木孫市

鈴木孫市
島與四郎
等重幸
遺言を
上人不告
て紀州よ
帰らんと
巧ふ図

頭如上人



島与四郎

玉堂画

いさく云起請文小血判を致し差出らば尔方門の歎願に相任せ雜賀表の仕置に於て赦免すべしと指揮し給て孫市與四郎門を畏りて起請文を認めて獻覽に入從是織田家の幕下に屬したり

○今年天正六年三月より翌同く七年秋八月まで織田本願寺の間合戦止り是信長の憤り散りて閣くに非ず中國の太守毛利右馬頭輝元足利義昭卿を鞆の城に迎へ織田信長を攻亡し再び上洛を催し將軍に直し信長の鋒先を折んと謀る容易なざる大敵の上毛利家より石山本願寺へ兵糧米を贈ゆる緯ども偏執の信長大きに怒つて既小去年より羽柴統前守を以て討手の先鋒とし播磨に發向す秀吉數度の戦功を顕はし毛利附属の豪傑勇士を或は攻亡し或は降伏せし

め義に依ると尼子義久尔臣山中鹿之介幸盛を救ひ又ハ備前の宇喜多に懇切し智術武器に伏せぬ者なり時攝品河邊郡伊丹の城主荒木攝津守村重なる人信長公へ忠義盡せし勇將之然るに一時安土城在勤の刻村重信長公の陰言を漏聽密に立腹し信長公を怨む遂に天正七年霜月中旬伊丹に籠城して叛謀の旗を揚長男志摩守村正と云ハ矢田部郡花隈の城に籠る尼が奇の城ハ麾下の諸將五人の勇士に二千五百人を籠隨分堅固小防戦すれども織田の大軍に勝算能く一旦奇手も引退きしが又翌年三月二日再び織田の大軍寄来りて先花隈の城を攻落さる荒木志摩守村正村ハ遁れて藝及父村重も本城に惚へ難く伊丹を出く尼が奇へ来れども敵の大軍攻つ

めくまは辛トて城を脱走し此所彼所小漂落をせしぐ遂に本願寺
御門主を憑之上人の慈愛を受く食客と成る此下の回條石山御退
去の途中不意に荒木村重が働き云出せば着官尔不審を無らしめん
為村重事跡の要を摘み後回の混雜を茲小解とす

此外中國筋諸所の戦争ハ石山の事記に據ね緯ゆ先断る如く
総て省畧す中には話説の断るも有べく其本傳に抱らざる向
を止事得ず楮敷の限に恐れて識さず

繪本石山軍記第三編卷之三 畢

